

## ヒトラーの死の謎

ナチズム文学研究における情報選択の問題（一考察）

濱 崎 一 敏

### Die Rätsel um den Tod Adolf Hitlers

Eine Betrachtung über die Informationsauswahl  
bei der Naziliteraturforschung

Kazutoshi HAMASAKI

#### はじめに

筆者は、近年、ナチズム（ドイツ・ファシズム）文学研究にかかわっている。ナチズム文学は、19世紀末ドイツが近代国家としてはじめて統一された以後の歴史的推移のなかで、しだいに醸成されてゆく経過をたどりながら、ついには、20年代に最盛期をむかえる。それは、人の直感的な情感にはたらきかけて、やがては人の魂を支配してゆく文学の魅惑的な機能を十分に利用したナチズムの勝利ともいえる過程であった。ナチズム文学は当時人の心の中にしのびこみ、30年代初頭のヒトラーによる政権掌握にいたる前夜を、とどこおりなく準備する一つの要因となったのである。統一以後の、政治・経済・社会領域における周知のようなドイツの性急な近代化が、ヒトラーという怪物を魔術のように呼びだすにいたった歴史的過程に、この文学現象は、そのまま呼応するものであった。

ナチズム文学は、したがって、当時の時代と社会をそのまま反映している。のみならず、当時のドイツ史の中で時代と社会を構築した諸力の一つであった。この意味において、ナチズム文学研究は、作品内在的な範囲に限定されることなく、なによりも、当時の時代状況と作品とのあいだにある密接かつ相互的な関連に注目がはらわれなければならない分野である。ナチズム文学研究は、ナチズム（ドイツ・ファシズム）の分析を必然的に必要としている。当然のことながら、独裁者ヒトラーもまた分析の対象とならなければならない。

第三帝国期（1933-1945）において歴史的推移の頂点にたつし、国家のあらゆる分

野において露骨なかたちで実現されたナチズムの実体は、しかし、なかなかその素顔を見せてはくれないように思われてならない。

ナチズム文学の研究に際して、かつてナチズム文学がもっていた文学としての機能と要素にかかわるもろもろのイメージを再構築するに当たり、当惑せざるをえないのは、今から数えてほぼ半世紀以上も前の文学およびファシズムに関する膨大な量の個々の情報をどのようにして集め、選択し、そして、どのように処理すべきかという問題である。

日本はいうにおよばず、ドイツにおいても、ナチズム文学研究に従事する研究者の数は、きわめて少ない。研究実績の十分な蓄積を前提とすることができない分野であるだけに、不統一な情報を、それぞれどのように価値評価すべきかという問題にも、往々、深刻な悩みがつきまとうのである。

常日頃筆者がもちづづけているこのような切実な問題意識を、「ヒトラーの死の謎」を追求することによって象徴的にとりあげ、かつまた、ありのままに吐露してみたい。それが、本論の奥底にある筆者の真の意図である。

「ヒトラーの死」は、世界史的な重大事件である。にもかかわらず、今なお謎が多い。ヒトラーの伝記にかかわる著作は、これまでに、あまた刊行された。あるいは、あらゆる文献のなかで、その叙述には枚挙にいとまがない。わたしたちは、まことしやかであいまいな情報をもとにして、ヒトラーの死を確信させられている。あるいは、中には、であるがゆえに、今なおヒトラーの生存説をあからさまに説く者もいる。

事実、それらを読めば読むほど、そしてまた、比較考証をこころみればみるほど、興味にくわえて、しだいに疑念が起り、それから、じわりとした言いようもない不安が、わたしたちをおそうようになるのである。もしも万が一、ヒトラーが、ベルリンに突入したソ連軍の堅固な包囲網をかいくぐり、1945年7月17日米英ソによるポツダム会談に際してスターリンが述べたと言われるように、生きながらえてスペインか南アメリカに脱出していたとすれば、その世界史的な意味は、はかり知れないほどおおきなものになることだろう。

1945年4月30日の午後、ヒトラーは、ブランデンブルグ門すぐわきの当時の総統官邸に設置された地下壕の中で、その前日結婚式をあげたばかりの愛人エヴァ・ブラウンとともに自殺した。その歴史的事実は、それでもなお、確かに動かしがたい真実であるように思われる。しかし、かれらがどのような死をえらび、その遺体にまつわる状況がどのようなであったかについては、以下に見るとおり、主だった歴史の検証者たちの間にも、意外なことにおおきな叙述の食い違いがある。

それは、史実の検証に際して、人の力がいかに非力であることを示している。同時に、

情報一般のあいまいさをも示している。あいまいな情報をもとにして、わたしたちは、ドイツ・ファシズム（ないしは、ナチズム文学）を分析し語ろうとする。ヒトラーの人物像、思想、侵略政策、文化文芸領域をふくめた国内政策、そしてまたユダヤ人の虐殺を語ろうとする。

「ヒトラーの生存説」をとさえかねないのは、かれらばかりではない。

## I ヒトラーの伝記

大戦後書かれたヒトラー伝記のうち、主なものは次の7冊であって、それぞれどれもが、膨大な量の公文書、手紙類、日記、直接間接の証言に基づいた力作である。内実をともなった真に権威のあるヒトラー伝記といえこれら7冊である、といっても過言にはならないだろう。今日世間にでまわっている無数のヒトラー自身にかかわる叙述のほとんどすべては、多かれ少なかれ、これらの書物を何等かのかたちで参照したものである、と考えたとしても大過はないのである。

殊に、(1)にあげたH・R・トレヴァー＝ローパーの『ヒトラー最期の日』は、ヒトラーが自殺にいたるまでの十日間を克明に追跡し、ヒトラーの死の事実を、終戦直後にはじめて実証的に確定したという意味において、その歴史的意義はきわめておおきい。

また、(5)にあげたヨアヒムC. フェストの『ヒトラー』は、これに匹敵するヒトラー伝は以後20年の間はあらわれないだろうと、激賞された大作である。この書をもとにして、1977年、当時の西ドイツにおいて、かの著名な記録映画『ヒトラー』（クリスチャン・ヘレンドェルファー監督）が製作公開された。

- (1) H.R.Trevor-Roper : THE LAST DAYS OF HITLER, 1947  
(H・R・トレヴァー＝ローパー『ヒトラー最期の日』筑摩書房 1975)  
著者＝英国の歴史家 戦時中英国情報部将校
- (2) Alan Bullock : HITLER. A STUDY IN TYRANNY, 1952  
(Alan Bullock : Hitler. Eine Studie über Tyrannei, Düsseldorf 1959)  
(アラン・バロック『アドルフ・ヒトラー』みすず書房 現代史体系 第2巻 1960)  
著者＝英国の歴史家
- (3) William L. Shirer : The Rise and Fall of the Third Reich, 1960  
(ウィリアム・L・シャイラー『第三帝国の興亡』全5巻 東京創元社 1961)  
著者＝米国のナチス研究ジャーナリスト

- (4) Werner Maser : Adolf Hitler. Legende, Mythos, Wirklichkeit, 1971  
 (ヴェルナー・マーザー 『ヒトラー伝：1 人間としてのヒトラー』  
 『ヒトラー伝：2 政治家としてのヒトラー』  
 サイマル出版会 1976  
 著者＝ナチズム研究家（現代史研究所理事、ミュンヘン大学で講義）  
 戦時中 SS 将校
- (5) Joachim C. Fest : Hitler, 1973  
 (ヨアヒム C. フェスト『ヒトラー』上・下巻 河出書房新社 1975)
- (6) John Toland : ADOLF HITLER, 1976  
 (ジョン・トランド『アドルフ・ヒトラー』上・下巻 集英社 1979)  
 著者＝米国のノンフィクション作家 大戦中陸軍勤務
- (7) David Irving : HITLER'S WAR, 1977  
 (ディヴィッド・アーヴィング『ヒトラーの戦争』全3巻 早川書房 1988)  
 著者＝英国の現代史家

## II 4月22日－5月2日の「暗黒期間」

トレヴァー＝ローパーは、著書『ヒトラー最期の日』の巻頭部分にある「第三版への序文」（1956年）の中で、1945年4月22日から5月2日までの10日間を、「暗黒期間」であったと述べている。すなわち、ヒトラーの存否に関連する最も重要な期間でありながら、この時生じたはずの一連のもろもろの出来事が、当初、何一つ実証できずに空白を呈していたためである。

世間には、いたるところヒトラーの生存説がまことしやかに飛びかっていた。ソ連は、ヒトラーを密かにかくまっているのはイギリス情報部である、と名指しで非難する始末であった。これを契機として、当のイギリス情報部から命を受けたトレヴァー＝ローパーの任務は、まさにこの10日間の空白をうめることにあった。

ヒトラーの最期に立ち会った生き証人たち、ないしはその正確な情報をもつ者たちを一人ずつ捜し出し、ついにかればヒトラーの自殺を確認する。トレヴァー＝ローパーにしたがい、この期間に生じた出来事のおおよそのあらましを再構成すると、次のとおりになる。

ヒトラーは4月20日、56才の誕生日を総統地下壕の中で祝った。その2日後、22日には有名な幕僚会議を開き、この席でかれは、第三帝国の失敗をはじめて認め、ベルリンに最期まで踏みとどまって死ぬつもりだ、と絶望的な決意を述べた。幕僚たちはそろって翻意をうながし、撤退して南独オーバーザルツブルクの洞窟に大本営をうつすようすすめたが、かれは聴きいれなかった。28日の真夜中から29日の朝にかけて、かれは16年来の愛人エヴァ・ブラウン（33才）と簡単な結婚式をあげる。その後、ただちに政治的遺書と私的遺書の二通をしたためる。午後、愛犬ブロンディを毒殺させる。30日の午後3時半、地下壕の私室において二人は自殺。

22日の夕刻以来、妻マグダと6人の幼子たち（ハイデ5才、ヘッダ6才、ヒルデ7才、ホルデ8才、ヘルムート9才、ヘルガ12才）とともに、地下壕（地下約15メートル、上階12室、下階18室）においてヒトラーと起居をともにしていたゲッベルスは、5月1日、任せられた首相の肩書をもってソ連軍との和平交渉を試みるが失敗。6人の子供たちを毒殺した後、夕8時半頃、ゲッベルス夫妻も自殺。

5月2日、ソ連軍が総統官邸に突入占拠。中庭において、ガソリンをかけられ火葬にふされたゲッベルス夫妻の遺体を発見。

### III ヒトラーの死の謎

トレヴァー＝ローパーによれば、エヴァ・ブラウンは毒薬による自殺。ヒトラーは自ら口中を射ぬいていた。ゲッベルス夫妻は庭に出て、SSの伝令兵に自らを撃たせて死んだ。トレヴァー＝ローパー以後の西側の伝記作者たちは、おおすじにおいて、今日にいたるまで、かれが主張したこのヒトラーの「ピストル自殺説」を支持している。

しかし、戦後23年を経た1968年、ソ連は突如ヒトラーの死に関するモスクワ公文書館の記録を公表し、西側の「ピストル自殺説」を否定して、「服毒自殺説」を強力に主張したのである。この記録文書の公表によって、ソ連軍が、総統官邸突入後、ゲッベルス夫妻とその子供たちの遺体はもちろん、爆弾の破裂孔内に埋められていたヒトラー夫妻の黒焦げの遺体を持ち帰り、検死していたことが初めて明らかになった。西側の伝記作者たちは、トレヴァー＝ローパーをはじめとして、いずれもこのソ連の記録文書に疑義をはさみ完全には信をおこうとはしていない。

確かに、そこにはいくつかの疑問点がないわけではないのである。(i) ソ連はこの記録文書を、なぜ戦後20年以上もたって公表したのか？(ii) この文書は、西ドイツにおいてドイツ語で公表されたのだが、ロシア語の原文が公表された形跡がない。(iii) ヒトラーのこう丸は、生体学的に、もともと一つしかなかった、と述べられて

いるが、生前にいくども身体検査を実施したことのある当時のドイツの医師たちの証言によれば、ヒトラーのこう丸は正常であった。(遺体はヒトラーのものではない。)(iv) 黒焦げになり灰になるほど焼きくずれた遺体の歯の間から、青酸カリのカプセルの破片が見つかるはずがない。(v) 服毒自殺後、ハインツ・リングエ(ヒトラーの従卒)がとどめの一発をくわえたかもしれない、とソ連側はのべておきながら、遺体に銃弾の外傷なしと結論づけているのは、明らかに矛盾である。等々。

モスクワ公文書館の記録文書の篇著者であるレフ・ベジュメンスキが主張している論点は、主として4つある。すなわち、(i) 西側の「ピストル自殺説」に基づいている証言には、食い違いがおおすぎる。ピストルの射入口を、ある者は右のこめかみと言い、ある者は左のこめかみ、そして他の者は口中と述べている。また、自殺直後のヒトラーとエヴァ・ブラウンの身体の位置(右か左か)、姿勢(坐っていたのか横たわっていたのか)についても一人一人証言が異なっている。(証言者たちが、総統は男らしくピストル自殺をしたのだ、という伝説を作りあげるために、故意に、事実とは違った証言をしているからだ。)(ii) カプセルの破片が歯の間にあった。(iii) 遺体は、いずれも、青酸カリによる服毒自殺の際に特有の、強いアーモンドの臭気を放っていた。(iv) 遺体の歯、入れ歯、虫歯のつめものが、生前のヒトラーのものと一緒に一致した。

ソ連側が西ドイツにおいて公表したこの記録文書の正式タイトルは、次のとおりであって、邦訳もある。

Lew Besymenski : Der Tod des Adolf Hitler. Unbekannte Dokumente aus  
Moskauer Archiven. Eingeleitet von Karl-Heinz  
Janben. Christian Wegner Verlag, Hamburg 1968

(レフ・ベジュメンスキ 『ヒトラーの死神 モスクワ公文書館の知られざる記録』  
国書刊行会 1984)

遺体などを撮影した20枚の写真が添付され、ドキュメントタッチに終始したこの文書によるソ連側の「服毒自殺説」には、それなりに人の信頼をよぶ説得力がある。殊に、ヒトラーの遺体を自殺直後に確認し、これを中庭に運び出して、火葬にくわわった5人の実際の目撃証人たちを、ソ連側は10年にわたって抑留尋問したのだが、遺体自体の検死解剖とともに、この事実は重い意味をもつと言わなければならない。オットー・ギュンシェ(SSの副官)、ハインツ・リングエ(ヒトラーの従卒)、ヨハン・ラッテンフーバー(ヒトラー護衛警官隊の指揮者)、ハンス・バウル(ヒトラー乗用機の操縦士)、そして、ハリー・メンゲルスハウゼン(SS護衛隊将校)がこの5名である。

かれらは、1956年釈放され、再度東ドイツに捕らえられたギュンシェを除き、4人は西ドイツへ帰国した。そしてトレヴァ＝ローパーの聴取を受けることになる。しかし、それによって、トレヴァ＝ローパーは、自説を変更することはなかった。

正しいのは、「ピストル自殺説」なのか、それとも「服毒自殺説」なのか？この歴史的な疑問に、今なお解答は見出されていない。

ましてや、「ピストル自殺説」に固執している西側のヒトラー伝記作者たちの間でも、ピストルの射入口や自殺の状況、そして総統地下壕内の自殺前後の有様などについて、個々微妙に、場合によってはおおきくその叙述が異なっている。ゲッベルス夫妻の自殺に関しても、事情はかわらない。むしろかれらの場合には、ヒトラー以上に事実に基づかないさまざまな憶測が氾濫している、と言っても過言ではない。

憶測は歪曲をとまなう。殊に、日本においては、すくなくともこの問題に関するかぎり、情報の混乱は一層はなはだしいようにみえる。例えば、ドイツ現代史を専攻し、ナチズム研究を長年専門としている<sup>(1)</sup>野田宣雄は、その著書『ヒトラーの時代』上・下巻（講談社1976）の中で、「ヒトラーの最期」という一節を設けて次のように描写している。ヒトラーは「ピストルでみずから五十六才のいのちをたつ。エヴァ・ブラウンもそのあとを追って毒をあおいだ。一説によると、ヒトラーはもはや自分でピストルをにぎることもできず、エヴァ・ブラウンに射殺してもらったのだともいわれる。」<sup>(2)</sup>

「ピストル自殺」であったのか、といういわば基本問題はさておくとしても、それでもなおかつこの描写には初歩的なミスがあり、疑問がのこる。

ヒトラーとエヴァ・ブラウンは、私室ないしは書斎に、二人きりでひきこもり自殺したのである。エヴァ・ブラウンが、ヒトラーの「あとを追って」毒をあおいだのかどうかは、これまでにどの主な伝記作者も明確には述べてはいない。述べられないからである。おなじように、エヴァ・ブラウンがヒトラーを射殺した、というのは、どのようにして第三者が確認できるのであろうか？この「一説」なるものとなえた張本人は、一体だれなのか？おそらくは、ヒトラーは「ピストルをにぎることができなかった」という憶測が、この「一説」の有力な根拠になっているのである。確かに、ヒトラーの両手、とくに左手は、病のために震えがひどく、ピストルをにぎれる状態ではなかった、と言われている。しかし、それは、「服毒自殺説」をとるソ連側ベジュメンスキの一方的な主張であって、<sup>(3)</sup>西側は、これを認めてはいない。もしかりにそうであったとしても、右手はつかうことができた、というのが、西側の主張である。<sup>(4)</sup>そのうえ、かれは、右ききであった。この事実がまた、弾丸の射入口は左こめかみであった、とする左手発射説が否定される理由でもある。

エヴァ・ブラウンがヒトラーを射殺した、というのは、結論から言えば、ソ連側の

主張に西側の「ピストル自殺説」をくっつけただけの安易な憶測論にすぎない。ヒトラーは、ピストルをにぎり発射することができる状態ではなかった。したがって、かれは、エヴァ・ブラウンに射殺してもらったはずだ、という憶測論にすぎないのである。個室の中の二人だけの自殺であるから、殊に、よほどの状況証拠でもないかぎり、このような、見てきたような説はたてられないはずである。

野田宣雄の描写は、初歩的な事実確認を怠った結果生じたミスにくわえて、憶測が歪曲にいたった例である。しかし、あってはならないことだが、それは、だれもが、ややともすると知らず知らずのうちに犯しがちな誤りである。問題はそんなことではない。一番の問題は、かれの描写によって、ヒトラーの死自体が、読者には疑問に思われてくるという点である。かれは、ヒトラーの「ピストル自殺説」にエヴァ・ブラウンによるいわば「ピストル他殺説」を対置している。この「自殺」と「他殺」という、重大な矛盾によって、読者には、疑問と、ひいては疑念が生じてくる。ゆくゆく、それが、ヒトラーの「生存説」に発展していったとしてもおかしくはない。数行後に、かれが、焼かれた死体の義歯の部分を手がかりとして、ヒトラーの死が確認された、と一見実証的にその死の事実を強調してみても、当初の否定的効果は同じである。あれは、一般読者を対象にした講談社文庫の通俗本であって、学問的な研究書であるわけではない、というのも、もちろん言いわけにはならない。であればこそ、なおさら、世間に危険な俗説を流布させないために用心がかん要である。

野田宣雄のような例は、けっして、まれではないのである。

#### IV 伝記作者たちの、ヒトラーの死に関する、さまざまな叙述の違い

本論 I 「ヒトラーの伝記」において羅列的にあげた 7 冊の著作を中心に、ヒトラーの自殺が、では、それぞれ、どのように叙述されているかを、具体的に比較検討してみる。その場合、もちろん、エヴァ・ブラウンとゲッベルス夫妻の自殺もあわせて問題になる。対比しやすいように、邦訳の中から、要点を抜き書きするかたちをとることにする。かっこ書きは、筆者がつけた註である。

##### (1) トレヴァ＝ローパー説（原著出版 1947年）

##### (イ) ヒトラーとエヴァ・ブラウンの自殺（邦訳 S. 206）

- ・ヒトラーとエヴァ・ブラウンは全部の者たちと握手し、私室に引き返した。
- ・一発の銃声が聞こえた。
- ・彼らは室内へはいった。
- ・ヒトラーは血にまみれたソファーの上に横たわっていた。



- ・彼は自分で口から射ぬいたのであった。(射入口は口中)
- ・エヴァ・ブラウンも、死体になって、ソファの上に横たわっていた。
- ・拳銃が彼女のそばに転がっていた。
- ・彼女は毒薬を飲んだのだった。
- ・時間は午後三時半だった。(1945年4月30日)

(ロ) 二人の遺体の処置(邦訳 S. 209-S. 210)

- ・爆弾穴が死体のための墓場に変えられたにちがいがなかった。  
(そこに埋められたのであろう。)
- ・二人の死体の処置については、これだけのことしか判明していない。
- ・骨はついに見つからなかった。
- ・おそらく、灰は箱に入れて、官邸の外へ持ち出したのであろう。

(イ) ゲッベルス夫妻の自殺と子供たちの死(邦訳 S. 217-S. 218)

- ・(ゲッベルスが)6人の子供に、その目的のために前から用意しておいたカプセルで、毒薬を飲ませた。
- ・二人は(見送る者たちに)ひとことも言葉をかけずに、階段を上って、庭へ出た。
- ・ほとんど同時に二発の銃声が聞こえた。
- ・二人は死体になって地上に横たわっていた。
- ・彼らを撃ったSSの伝令兵がそばに立っていた。
- ・(火葬によって)焦げた死体は翌日ロシア軍に発見された。
- ・(それから皆が)地下壕を立ち去るときには、もう9時(夕)になっていた。

(2) アラン・バロック説(原著出版 1952年)

(イ) ヒトラーとエヴァ・ブラウンの自殺(邦訳 S. 382)

- ・別かれの挨拶をした。
- ・ヒトラーはエヴァと一緒に総統の部屋に戻って戸を閉めた。
- ・ほんの数分が経過した。と、そのとき、一発の銃声が聞こえた。
- ・しばらくして、いくたりかのものが戸を開けた。
- ・ヒトラーはソファの上に横になり、ソファは血にまみれていた。
- ・弾丸は口の中に撃ちこまれていた。(射入口は口中)
- ・彼の右側にエヴァ・ブラウンが、死んだまま横になっていた。  
(ヒトラーが左、ブラウンが右)
- ・エヴァは毒を飲んでいて。
- ・時刻は午後三時半であった。

## (ロ) 二人の遺体の処置 (邦訳 S. 383)

- 二つの火葬体の遺骨がどうなったのか、いまだにわからない。
- トレヴァー＝ローパー氏は、遺骨は一つの箱に収められて、ヒトラー・ユーゲントの隊長アルトゥール・アクスマンに手渡されたのだという見解を、とりたいたらしい様子に見受けられる。

## (ハ) ゲッベルス夫妻の自殺と子供たちの死 (邦訳 S. 383)

- 五月一日の夕がた、ゲッベルスは、子供たちに毒を飲ませた。
- ゲッベルスは首相官邸の庭で妻を撃ち、ついで自分もピストルで自決した。  
(ゲッベルスが妻と自分自身を撃った。)
- 火葬にふされた残骸は翌日ロシア軍に見つけられてしまった。

## (3) ウイリアム・L・シャイラー説 (原著出版 1960年)

## (イ) ヒトラーとエヴァ・ブラウンの自殺 (邦訳 第5巻 S. 310-S. 311)

- ふたりは別かれを告げ終えると、自室にひきとった。
- 間もなくして、ピストルの音が聞こえた。
- 彼らはそっと総統の部屋にはいった。
- ヒトラーの死体はソファの上に長まって、血が滴っていた。
- 口を通して撃っていた。(射入口は口中)
- そのそばに、エヴァ・ブラウンが横たわっていた。
- 二丁のピストルが床にころがっていた。
- 彼女は毒薬をのんだのである。
- 時刻は午後三時半であった。

## (ロ) 二人の遺体の処置 (邦訳 第5巻 S. 312)

- (火葬後の) 彼らの遺骨はついに発見されなかった。
- 戦後、ヒトラーはまだ生きのびているという噂がたった。
- しかし、この問題については、なんら疑いの余地は残されていない。

## (ハ) ゲッベルス夫妻の自殺と子供たちの死 (邦訳第5巻 S. 314-S. 315)

- ゲッベルスはいま子供たちを殺したばかりであることを、副官にすら話さなかった。
- ゲッベルス夫妻は、午後8時30分ごろ、居合わせたものに、さようならをいい、庭へ出る階段をのぼった。
- ふたりの求めにより、SSの番兵が、後頭部に二発の弾を撃ちこんだ。
- ソ連軍は次の日、黒焦げになった宣伝相夫妻の死体を発見した。

## (4) ヴェルナー・マーザー説（原著出版 1971年）

- ・トレヴァ＝ローパーの著書『ヒトラー最期の日』は、きわめて綿密正確なので、ここでその内容を繰り返すまでもない。

しかし、ヒトラーの遺体がどうなったかについては、あいまいなままである。

（邦訳『ヒトラー伝：2 政治家としてのヒトラー』 S. 479）

（このように述べて、マーザーは、もっぱらソ連側レフ・ベジュメンスキの「服毒自殺説」に反論をくわえている。その論点は、本論Ⅲ「ヒトラーの死の謎」であげた西側の主張とおなじである。マーザー説は、トレヴァ＝ローパー説にそのまましたがっている。）<sup>(5)</sup>

## (5) ヨアヒムC. フェスト説（原著出版 1973年）

## (イ) ヒトラーとエヴァ・ブラウンの自殺（邦訳 下巻 S. 446）

- ・妻と共に彼は皆と握手をし、自室のドアに姿を消した。
- ・午後三時半少し前のことである。
- ・ヒトラーは顔を血で汚してソファにくずおれていた。
- ・彼のかたわらには妻が未使用のピストルを膝において坐っていた。（ブラウンは坐っていた。ピストルは彼女の膝の上。）
- ・彼女は毒をあおいだのだった。
- ・ソ連側は、ヒトラーも毒薬で生命を断った、という見解をとった。しかしながら……………。（ソ連の説に反論する。）

## (ロ) 二人の遺体の処置（邦訳 下巻 S. 447）

- ・遺体はもはや見分けがつかなかった。
- ・すでに細かい灰が風に舞っていた。
- ・彼が葬られたのは、瓦れきの山、壁の残骸、何台かのコンクリートミキサー、散乱したくずのたぐいの間の固くつきかためられたりゅう弾孔であった。（遺体は見つかるはずがない。）

## (ハ) ゲッベルス夫妻の自殺と子供たちの死（邦訳 下巻 S. 448）

- ・5月1日ゲッベルスは自殺した。（と、述べただけ。）

## (6) ジョン・トーランド説（原著出版 1976年）

## (イ) ヒトラーとエヴァ・ブラウンの自殺（邦訳 下巻 S. 502）

- ・先に死んだのはエヴァのほうだった。服毒自殺だった。
- ・午後三時半ごろ、ヒトラーはピストルをとりあげ、銃口を右のこめかみに押し当てて引金を引いた。（射入口は右のこめかみ）

- ゲッベルスを先頭にヒトラーの控室に駆けこんだ。
  - 長椅子に坐ったヒトラーが低いテーブルにうつぶせになっていた。(ヒトラーは坐ってうつぶせ)
  - その左側で、エヴァが肘掛けの上に倒れていた。  
(ヒトラーは右、エヴァは左で肘掛けの上)
- (ロ) 二人の遺体の処置 (邦訳 下巻 S. 504 および S. 507)
- 二人の黒焦げの遺体はキャンバスに包まれ、地下壕出口の砲弾穴に投げこまれ、上から土をかぶせて、表面を木の棒で突き固められた。
  - ソ連側レフ・ベジュメンスキの本にある遺体の歯列写真を、1972年、カリフォルニア大学の歯科法医学ライダー・ソグニーズ博士がヒトラーのものと断定。第六回国際法医学学会で発表。
  - したがって、ヒトラーが死亡したこと、ソ連が検死をおこなったのはヒトラーの遺体であることを、ソグニーズは立証した。
- (イ) ゲッベルス夫妻の自殺と子供たちの死 (邦訳 下巻 S. 507-S. 507)
- クンツという歯科医がモルヒネを注射して子供たちを眠らせた。ゲッベルス夫人みずから一人一人の口の中で青酸カリ入りのアンプルを砕いた。(ゲッベルス夫人が子供たちを殺した。これは、ソ連側レフ・ベジュメンスキの主張とまったく同じである)<sup>(6)</sup>
  - ゲッベルス夫妻は腕を組んで部屋を出た。
  - ゲッベルスが友人たちに、死体を運んでもらわなくてもいいように、歩いて階段をのぼり、庭へ出ることにすると、皮肉っぽい口ぶりであった。
  - 二発の銃声が響いた。
  - 一人のSS当番兵がかれらを撃ったのだった。
  - ガソリンを遺体に振りかけて火をつけた。
- (7) デイヴィッド・アーヴィング説 (原著出版 1977年)
- (イ) ヒトラーとエヴァ・ブラウンの自殺 (邦訳 第3巻 S. 459)
- ヒトラーとエヴァが書斎に退いた時は、三時半ごろだった。
  - 二重ドアを閉めた。
  - 二人は寝椅子に腰をおろし坐った。
  - 両人は、口紅入れのように、真ちゅうの容器のねじをはずし、こはく色の液体のは入った薄いガラスのびんを取り出した。
  - エヴァはびんを噛み、彼の肩に頭を沈めた。  
(二人は寄り添っていた。)

- ・アドルフ・ヒトラーは震える手を制しながら重い7.65ミリ・ワルサーを右のこめかみにあて、口の中でガラスを噛み、引金を引いた。（射入口は右こめかみ。毒薬とピストル両方で自殺）

（以下の叙述はない）

トレヴァー＝ローパーからデイヴィッド・アーヴィングまで、西側の代表的なヒトラー伝記をみても、それぞれ、叙述が細部にわたり、生き生きとしていることに気づく。どれもが、きわめて実証的であるように思われる。しかし、これらの説を、一つ一つ読みすすんでいくうちに、わたしたちの頭は少なからず混乱してくる。ヒトラーはピストル自殺。エヴァ・ブラウンは服毒。これは確かなようだ。次に、その具体的な方法と状況、ということになると、はっきりしない、あいまいなものになってくる。情報が錯綜して、しだいに、とらえどころがなくなるのである。その結果、逆に、ヒトラーの「ピストル自殺説」が、だんだんと、あやしいものに思われてきてしまうのである。

ゲッベルス夫妻は、実際にはどのようにして死んだのか？ 厳密な意味では、自殺なのか、他殺なのか？ ゲッベルスの幼ない6人の子供たちは、父親と母親の、どちらによって殺されたのか？ かれらは、だれの手によって残された人生を断たれ、おいしいケーキと夕陽の中でわれを忘れて遊びまわる楽しさを、失わなければならなかったのか。

真相を把握し、明確な像を頭に描いて一段落するのが、だんだんとむずかしくなってくる。

ヒトラー以外の伝記の中では、かれらの死は、どのように描かれているのであろうか。つまり、当事者たちのうち、ヒトラーを中心にして、焦点をあわせるのではなくて、ゲッベルスとエヴァ・ブラウンの人生を記述した伝記をとりあげてみると、また違った角度から、真相が見えてくるのかもしれない。そのようにも、考えられる。しかし、ことは、そう単純ではない。少なからず、ますます混乱してくるのである。それを、続けて以下に示す。

(8) Roger Manvell and Heinrich Fraenkel : Doctor Goebbels, His Life and Death, London 1960

（ロージャー・マンヴェル、ハインリッヒ・フレンケル『第三帝国と宣伝 ゲッベルスの生涯』東京創元社 初版 1962）

(イ) ヒトラーとエヴァ・ブラウンの自殺（邦訳 S. 270）

- ・午後三時半、マグダ（ゲッベルス夫人）は一発の銃声を聴いた。

- ・ヒトラーが自ら口中にピストルを放ったのであった。（射入口は口中）
- ・ヒトラーはエヴァのかたわらに、ソファの上に倒れていた。
- ・エヴァは毒をのんで死んだ。

(ロ) 二人の遺体の処置（邦訳 S. 271）

- ・二つの遺体は二時間以上も燃え続けた。
- ・遺骨は庭のどこかに埋められた。

(イ) ゲッベルス夫妻の自殺と子供たちの死（邦訳 S. 273-S. 275）

- ・マグダは子供たちに睡眠薬を夕食と一緒に飲ませ、床につかせた。
- ・子供たちが眠りに入るとマグダは一人づつ、サジで毒薬をあたえた。（ゲッベルス夫人が子供たちを殺した。）
- ・ゲッベルスとマグダが腕を組んで部屋を出てきた。
- ・ゲッベルスは、友人に重い死体を外の庭に運び出してもらう厄介をかけないために、自分で急な階段をのぼってやる、と冗談をいった。
- ・（暗示的に）マグダは夫から撃たれる直前に毒を飲んだ。
- ・（暗示的に）ゲッベルスも自分を撃つ前にカプセルを噛んだ。
- ・五月一日の夜、八時半から九時までの出来事であった。
- ・夫妻の火葬体と子供たちの遺体は、敵の手によって埋葬された。
- ・その場所については何の記録も残っていない。

(9) Nerin E. Gun : EVA BRAUN, Hitler's Mistress, 1968

（ネリン・E・グーン 『エヴァ・ブラウン ヒトラーの愛人』

日本リーダーズ ダイジェスト社 1973）

(イ) ヒトラーとエヴァ・ブラウンの自殺（邦訳 S. 272-S. 273）

- ・ヒトラーとエヴァは書斎にひっこんだ。
- ・ピストルが発射されたのは、3時22分から3時37分の間である。
- ・エヴァは頭を横たえ、ヒトラーの腕に触れるようと左手を伸ばしたまま、ソファの左端に倒れていた。
- ・口紅のように見える毒薬入りの小ビンが割られて、床に落ちていた。酸とアーモンドの臭いがした。
- ・ヒトラーはソファの右端に坐り、左手をソファの背にそって伸ばしていた。（ヒトラーが坐って右、エヴァは横たわって左）
- ・ヒトラーは7.65口径のワルサーを右のこめかみに発射。（射入口は右こめかみ）

(ロ) 二人の遺体の処置（邦訳 S. 376-S. 377）

- ・元ソ連軍情報部将校ベジュメンスキの手になる小冊子は、ヒトラーとエヴァの遺体が確認されたというが、この主張には物的な証拠の裏付けがない。そしてまた、調査結果の公表に何故20年以上もかかったのか？
  - ・1945年4月30日に、何が起こったかは、現代史の謎であって、遺体の行方もわかっていない。
- (イ) ゲッベルス夫妻の自殺と子供たちの死 (邦訳 S. 381-S. 382)
- ・シュトムプェッカー博士の付き添いのもと、マグダが、ストリキニーネの皮下注射器をもちいて、ハイデ(5才)からヘルガ(12才)へと、順々に子供たちを殺した。(ゲッベルス夫人が、注射で、子供たちを殺した。)
  - ・子供たちの死の一時間後、マグダは、ヒトラーの名をつぶやきながら、毒をあおいだ。(ゲッベルス夫人は服毒自殺)
  - ・同日の夜、ゲッベルスは、彼の宣伝省の建物内で自殺した。(ゲッベルスは宣伝省で自殺)
- (夫妻の遺体に関して、以後の記述はない。)

## V ヒトラーの死の真相——情報の選択の問題

情報というのは、大抵のものは、一つ一つ、ばらばらであるほうがよい。定式化され統一されて、一つの思想を形成するようになると危険である。支配的なシステムとなって、個々の人間の思考や反省を奪い、大なり小なり猪突猛進の行動のみを要求するようになる。人間は、みずみずしい個別的な生命を失なう。切り捨てられる人々が続出するようになる。

ある情報を提供しようとするとき、もしくは、ある思想を提起しようとするときには、それが即座に、他人の操作そのものである、というおそれを抱くことが必要である。しゅう恥の念がなによりも必要だろう。

逆に、それらを提供提起されたばあいには、まずは疑い、身ぐるみはぎとってみて、後に残るものが何かを、検証してみなければならない。場合によっては血みどろのすさまじい闘いにもなるだろうが、これが、自分を守る唯一の方策である。

一般的に、情報のとりあつかい方、については、このように考えてよいだろう。

しかし、「ヒトラーの死」自体は、明らかに、あれこれの解釈を必要とする以前の、一つの事実にすぎない。このような一回限りの事実に関する情報は、いろいろさまざま、気楽に飛びかかってもらってはこまるのである。これほど重大な歴史的事実が、しかも、数おおくの証言、資料、科学機器を駆使できる状況にありながら、統一的に実証できないというのは、不思議であるというほかはない。

本論で検討している9人の、西側の代表的な伝記作者たちが述べているヒトラーの死のありさまは、注意をこらして分析してみると、それぞれ、少なからず異なっている。「ピストル自殺説」という点では一致しているものの、射入口については、口中と右こめかみ、あるいは、どことも知れずあいまいなもの、とにわかれ、エヴァ・ブラウンとの位置関係も、右という者、左という者、そして、これには、はっきりとは触れない者、とにわかれている。自殺直後の二人の姿勢、ということになると、ますます混沌としてくる。ソファの上に横たわっていた、坐って前の低いテーブルにうつぶせになっていた、坐ったまま左手をソファの背に伸ばしていた（頭はうつぶせになってはいなかった）、というのが、ヒトラーの姿勢である。エヴァは、ソファの上に横たわっていた、というのが多いが、肘掛けのうえに倒れていた、ヒトラーの肩に頭を沈めていた、ソファに坐って膝の上にはピストルがあった、というまでである。

ゲッベルスの子供たちは、だれが殺したのか。幼ないかれらは、どん欲残酷無慈悲なおとなたちが引き起こした戦争の犠牲者であった。父親のゲッベルスが殺した、母親のマグダが、睡眠薬と毒で、ストリキニーネの注射で、歯科医のクンツが眠らせた後青酸カリのカプセルを口の中で噛ませて、というふうに、いろいろな叙述がかさなっている。

ゲッベルス夫婦は、どのようにして死んだのか。地下壕の階段をのぼり総統官邸の庭に出て、SSの兵士に撃たせて自殺した。ゲッベルスがピストルで妻を撃ち、それから自分を撃った。庭で二人とも服毒自殺。妻は（おそらく地下壕内で）服毒自殺、ゲッベルスは宣伝省で自殺。というような調子では、単なる読者として通読しているかぎり、どれが真実であるのか、わからなくなってくる。

真相にちかづくために、これらを整理して、気づいた点をあげると次のようになる。

1968年には、あのレフ・ベジュメンスキの記録文書なるものが、西ドイツで出版された。この時点までは、「ヒトラーの死」にかかわる描写には、ほぼ定まったパターンがある。すなわち、ヒトラーは口中を射抜き、エヴァは服毒、二人はソファに横たわっている。ところが、1968年以後には、ヒトラーは、突然右こめかみを撃ったことになる。そのうえ、ソファの上に坐ってしまうのである。もはや横たわってはいない。エヴァは、服毒後、かわらず、ソファの上で横たわっているか、端のほうに倒れかかっている。ヒトラーの位置は、おおまかだが、右側に定まってしまうのである。

ヴェルナー・マーザー（原著出版 1971年）は、それでも、1947年当初のトレヴァ・ローパー説に固執して、まったく動揺をみせていない。ソ連側ベジュメンスキの「服毒自殺説」に猛然とくらいついている。専ら、これに反論を企てている。他人の説に全面的によりかかって、踏台にしておいて、余った両手を振りまわしてソ連側に噛みつくのだから、あまり素直でいい性格ではないのではないか、と余計な心配までした



くなるほどである。マーザーにかぎらず、1968年以後は、西側のどの伝記作者も、ベジュメンスキ説に一応の反論を試みている。しかし、同時に、ソ連説の影響が、明らかにあらわれてくるのである。その明らかな例は、ジョン・トーランド（原著出版 1976年）とディヴッド・アーヴィング（原著出版 1977年）である。

「アドルフ・ヒトラーは震える手を制しながら重い7.65ミリ・ワルサーを右のこめかみにあて、口の中でガラスを噛み、引金を引いた」<sup>(7)</sup>というのが、アーヴィング説である。この説には、ソ連側の重要な主張が二点はいっている。すなわち、ヒトラーの「両手は、震えがとてひどかった……左手の震えは、右手より遙かに強く、しかも1944年7月20日の暗殺計画前から既に震えていた」<sup>(8)</sup>というのが一点。もう一点は、いわずもがな「服毒自殺説」そのものである。西と東の、あい異なる両政治体制の主張を、いわば折衷案にしているのだから、この説の当人は、本当にくそ真面目なのか、それとも単に器用で玄人なのか、よくは分からないが、この「ピストル」と「服毒」とによる、ダブル自殺の可能性は、実際のところあるのだろうか。

ベジュメンスキは、これを、論理的にはっきりと否定している。ピストルの引金を引いてから、それから、青酸カリのカプセルを噛む、というのは不可能である。逆の順序も到底ありえない。青酸カリは、瞬間的に作用するからである。すると、ピストルを発射して、寸分たがわず同時に、カプセルを噛まなければならない。「この方法はいずれにせよ大きな意志力、瞬間的反応、それにがっちりとした手を必要とする………ところがヒトラーの両手がどんなにひどく震えていたか………」<sup>(9)</sup>というのである。だれもが、納得せざるをえない説明である。手が震えていなくとも、とても難しい技術であるような気がする。ソ連のある医学博士が、このようなケースに出会ったことがあるか、と尋ねられて、否定の解答をした、というベジュメンスキの論証も、けっしてまやかしであるようには思えない。ダブル自殺というのは、ありえないのである。すると、ヒトラーの自殺は、「ピストル」か「服毒」かの、二者択一の問題になってくる。

アーヴィングは、西側説とソ連説とを簡単に折衷にして、矛盾だらけであるのに澄ましている。その意味では、前述の日本の野田宣雄と、とてもよく似ている。アーヴィングは、イギリスの野田宣雄である。

であるからといって、かれらは、非難されてしかるべきだ、と一概に言うのではない。歪曲され矛盾に満ちた安易な俗説が、どれほどたくさん、世間に出まわっているのかを、かれらの例は、如実に示しているのである。

レフ・ベジュメンスキの本にある遺体の歯列写真を、1972年、カリフォルニア大学の歯科法医学ライダー・ソグニーズ博士がヒトラーのものと断定。第六回国際法医学学会で発表。したがって、ヒトラーが死亡したこと、ソ連が検死解剖をおこなったの

はヒトラーの遺体であることを、ソグニーズ博士は立証した。と、このように、ジョン・トーランドは、重大な歴史的事実を紹介している。<sup>100</sup>ソグニーズは、アメリカの医師であるから、ソ連のまわし者というのでなければ、信用に値いするはずである。ソ連は、まぎれもなくヒトラーの遺体を、検死解剖したことになる。

トーランドは、しかし、「服毒自殺説」をとらない。あくまでも、「ピストル自殺説」を主張するのである。頭蓋骨に弾創がなかったというアリバイがないではないか、とかれは言う。それから、地下壕内の目撃者たちは、だれ一人、ヒトラーの唇の青酸カリによる明白な変色に気づかなかった。空っぽの毒入りアンプルも一個しか発見されていない。つまり、毒を飲んだのは、エヴァー一人であって、ヒトラーは飲まなかった、というのである。<sup>101</sup>

トーランドをはじめ、西側の主張はすべて、当時の目撃者たちの口述による証言にもとづいている。ソ連側は、証言と検死解剖の両方にもとづき、結論を出しているのである。一般的に考えれば、ソ連のほうが有利なはずである。しかし、いま一つ説得力に欠けるところがある。西側は、どうしても納得しない。それなら、科学的な実証主義にしたがって、微に入り細に入り写真を公表し、場合によっては、遺体の現物を西側に空輸して、ほら、こうなっているから「服毒」に決まっている、と胸を張って大声で言えばいいではないか、と、じれっとなるのだが、これがまた不可能なのである。というのも、「後部頭蓋の一部が検死解剖の際には行方不明だった」<sup>102</sup>というのだからである。なにより大切な頭の一部が、失なわれて行方不明だというのだから、始末が悪い、だけではすまされない。「ピストル自殺説」を否定する切り札は、もう、どこにもないのである。

ただ、ダブル自殺はありえない、という大前提に立てば、「ピストル」か「服毒」か、のどちらかである。すると、ソ連が、証拠としている青酸カリのカプセルの破片を西へ見せれば、それで、はっきりするような気もする。毒で死んだのであって、ピストルではない、ということが明確になりはしないか。これも、しかし、やっぱり駄目なのだろう。ソ連は、西を信用していない。西もまた、ソ連の体制をまるっきり疑っている。そんなカプセルの破片、どこかで即席にねつ造してきたのだろう、くらいに考えて、笑ってすませるに違いないのである。こうなると、科学的実証主義の問題ではなくて、要は、両政治体制の対決がかかっている問題であるように、だんだんと、思われてきてしまうのである。いわば、東西の、思想闘争を含む問題である。

だがしかし、本論では、このようなレベルの政治は、あえて論じないことにする。このばあい、政治領域の考察は、機をあらため、独自のテーマで、一考を要するかなり複雑な問題であるように思われるからである。それは、「ヒトラーの死」に関し、あれこれの見解の相違といったものが生じる以前の、事実関係のみを追求して謎にせ

まるという、本論の趣旨をはるかにこえるものである。

ジョン・トーランドが、ソ連説から決定的な影響を受けたのは、ゲッベルス夫人マグダによる子殺しの場面である。これは、引き写しのように、ベジュメンスキそのままであるから、どんな論証も必要がないほどである。<sup>13</sup>

それによると、ゲッベルス夫人が、まず、歯科医のクンツをともなって、子供たちの寝室へ行く。狭い地下壕内の出来事である。そして、床に就いたばかりの子供たちを起こして言うのである。「ねえお前たち、こわがらないで、先生が今、お前たちに注射をしますからね。子供たちや兵隊さんたちが、みんな今してもらっている注射をね。」一人一人に、クンツがモルヒネを注射する。それから十分後に、母親は、眠った子供たちの口の中へ、シアン化カリの押し潰したアンプルを入れるのである。凄惨な光景である。もしも、これを素材にして、悲劇を創作するとしたら、ファシズムと戦争と、そして人間が、この場面一つに凝縮されることになるだろう。(死んでしまう、ということは、一体どんなことなのだろうか。)

クンツは、ヒトラー配下総理府勤務の歯科医である。ソ連に抑留されて尋問を受けた。その結果、子供たちの殺害は、母親によってなされたこと。その詳細が、細部にいたるまで明らかになった。かれらの殺害に直接たずさわったのは、母親のマグダとクンツ、そして、実は、もう一人、ヒトラーの侍医シュトゥムプェッカーであった。かれは、マグダから求められ、それに応じて、実際に寝室の中で、この殺害に手をかしたのである。しかし、かれは、ドイツの敗戦時にはすでに死んでいた。マグダも、もちろん生きてはいなかった。ゲッベルスの子供たちの死の真相を証言できるのは、ソ連に抑留されたクンツ、ただ一人だったのである。

この意味において、トーランドがそのまま採用した、ゲッベルス夫人による子殺し、というベジュメンスキ説は、信頼に値するものと思われる。

ゲッベルス夫婦は、どのようにして死んだのか。その真相は何か？

ベジュメンスキの記録文書には、ゲッベルスの「死亡原因」について、解剖結果が次のように記されている。

「部分的に焼け焦げているこの死体には、致命傷あるいは疾病のはっきりした特徴は確認されなかった。

この死体の診査に際して、苦へん桃の臭いが感知された。口中ではアンプルの破片が発見されている。内部器官と血液の化学検査によって、シアン化合物の現存が実証された。したがって、この名前のわからない男性(ゲッベルスを指している——引用者註)の死は、シアン化合物による中毒の結果として生じたものである、という結論が引き出されなければならない。」<sup>14</sup>

妻マグダの解剖結果も、ほぼ同じである。死体には、「致命的に重い傷や、疾病の

明らかな徴候」は発見されず、内臓には「シアン化合物の現存」が確認され、口中には、「ガラスアンプルの破片」があった、というものである。<sup>69</sup>

したがって、ソ連側は、この場合も一貫して、「服毒自殺説」を主張している。死体には、「致命傷」もしくは「致命的に重い傷」は、見つからなかった、というのであるから、「服毒」と同時に、あるいはその直後に、第三者にとどめの一発を撃ってもらった、という可能性も完全に否定しているのである。西側は、しかし、総統官邸の庭に出て、SSの兵士に撃たせて自殺した、というのが大部分である。アラン・バロック説では、ゲッベルスが、妻と自分自身を撃ったことになっている。いずれにしても、「銃弾による自殺」が、西側の主張である。

『ゲッベルスの生涯』（原著出版1960年）を書いたロージャー・マンヴェルおよびハインリッヒ・フレンケルは、夫婦とも庭に出て「服毒自殺」をした、と暗示的に述べているのだが、暗示的であって実証的であるわけではない。<sup>70</sup>しかし、これは、ソ連側にとっては、冷たい西の風の中で、唯一のありがたい味方のように思われることだろう。

エヴァ・ブラウンの伝記を書いたネリン・E・グーン（原著出版1968年）によると、マグダは服毒自殺、ゲッベルスはわざわざ宣伝省に出かけて行って自殺、ということになっている。<sup>71</sup>ソ連は、かれらの死体を二つとも、地下壕出口の庭から運び去り、解剖にふした、と述べているのである。宣伝省からもち帰ったとは述べてはいない。それから、ゲッベルスの黒焦げ死体の写真も公表して、ソ連説にたいする疑義を払拭しようとしている。

これを、根本的な次元で疑わないかぎり、グーンの説は、あまり、あてにはならないことになる。

「銃弾」か「服毒」か、というゲッベルス夫妻の自殺に関する東西の対立は、ヒトラーの自殺は「ピストル」か「服毒」か、という問題とまったく同じ次元の、東西対決の様相を呈している。

## おわりに

情報の選択にあたっては、まず、本流から源流を探しとめ、それから、ちくいち、一つ一つを精査して、論証をもう一度再構成しながら、この真実をつきとめてゆく必要がある。

この意味においては、本論は、けっして充分だとはいえない。まことに、ささやかなのである。第二次世界大戦のドイツの資料に、直接当たってしまった、わけではない。ソ連の証拠の現物に触れることは、なおさら不可能である。

そういう作業に長年をかけて、ヒトラーの死の真相を明らかにしようと、真面目に努めたとしても、しかし、おそらくは、「ピストル」か「服毒」か、の結論は、容易には出そうにない。西と東の、いわばトップレベルの協力体制がないかぎり、これはとても難しいだろう、というのが実感である。

それが実現しないのであるから、これはもう、学問研究という、青白い顔の学徒仲間だけで、何とかできる問題ではない。どう猛な政治レベルの問題である。

「ピストル」か「服毒」かは、はっきりはしないが、ヒトラーが自殺していた、というのは確かだと言ってよいだろう。ただ、その具体的な方法と直後のありさまは、混沌としている。いくつか、整頓はできるが、説得力のある完全なものにはとてもならない。

だから、ヒトラーは、今も、いつでも生きかえる危険がある。

わたしたちもまた、どう猛になって、このヒトラーというやつを、殺し続けなければならない。

と同時に、「ヒトラーの死」という、さほど遠くない過去の歴史的にみて重大な事実に関してさえ、まことしやかにあいまいな情報のはんらんしているという、このような現状にたいする認識は、ドイツ・ファシズムもしくはナチズム文学研究のありかたに、再度、あらためて一考をうながす契機にならなければならないように思われるのである。そして、それは、ヨーロッパからは地理的に遠隔の地にあり、しかも、明治以来、オリジナルな資料の収集および方法のあらゆる次元において、長期にわたり自らの基盤をもたない「輸入学問」に徹してきた日本におけるヨーロッパ学一般にたいして、もう一度、基本的な注意をうながすものだ、と、このようにもいえないだろうか。

## Zusammenfassung

Die Naziliteratur ist eigentlich durch den Lauf der deutschen Geschichte nach der ersten staatlichen Einigung im Jahr 1871 allmählich heraufbeschworen worden und hat schließlich in den Zwanziger Jahren in ihrer Blütezeit gestanden. In dieser Periode wirkte sie auf das Gefühl ein, schlich in den Sinn der Deutschen hinein und beherrschte ihre Seele bis in die Tiefe, um die unglückverheißende Bühne für das Auftreten Adolf Hitlers vorzubereiten. Der Nationalsozialismus hat also damals auch im Bereich der Literatur einen durchschlagenden Erfolg gehabt. Daher stand dieses literarische Phänomen gerade in Einklang mit der deutschen Geschichte, in der die allgemein bekannte

rasche Modernisierung der Politik, Wirtschaft und auch Gesellschaft wie mit magischer Kraft das Monster Hitler heraufbeschworen hat.

Sie war eine der Kräfte, die damals zur Gestaltung der Zeit und Gesellschaft beigetragen haben, und spiegelt deswegen die damalige Zeit und Gesellschaft wieder. In diesem Sinne sollte sich die Erforschung der Naziliteratur nicht nur innerhalb werkimmanenter Grenzen bleiben, sondern auch unter anderem auf untrennbare gegenseitige Beziehungen zwischen Werken und Zeitverhältnissen ihre Aufmerksamkeit richten. Zwangsläufig braucht sie dann eine Analyse der Nationalsozialismus. Dabei sollte auch der Diktator Adolf Hitler selbstverständlich zentrale Figur werden.

Es scheint aber gar nicht einfach zu sein, das Wesen des Nationalsozialismus genau zu erfassen, der in der Zeit des Dritten Reiches seinen Höhepunkt erreicht hat und in allen Institutionen mit rücksichtslosesten Grausamkeiten verwirklicht worden ist. Und bei der Rekonstruktion von charakteristischen Faktoren und Funktionen der Naziliteratur muß man außerdem öfters, vor allem in Japan, in Verlegenheit geraten, weil man stets auf die Frage stößt, wie unter umfangreichsten Materialien, die vor über einem halben Jahrhundert in Deutschland entstanden sind, die für das jeweilige Forschungsthema geeigneten eins nach dem anderen ausgewählt, gesammelt, und dann behandelt werden sollen.

Dazu kommt noch, daß es ganz wenige Wissenschaftler in Japan sowie in Deutschland gab und gibt, die sich mit diesem Thema beschäftigen wollen. Man kann demnach im Bereich der Forschung nicht genügend auf geschichtliche Kenntnisse zurückgreifen. Im Fall der Naziliteraturforschung wird man notwendigerweise vom Problem der für einen Aufsatz einheitlichen Informationsauswahl schwer belastet.

Die Absicht dieses Aufsatzes liegt deshalb darin, unter dem Titel "Die Rätsel um den Tod Adolf Hitlers" als symbolischem Thema dieses dringende Problem bewußt zu machen und konkret zu behandeln. Weltgeschichtlich gesehen, war der Tod Hitlers ein entscheidendes Ereignis. Man hat bisher in seinen Biographien, die nach dem Zweiten Weltkrieg zahlreich herausgekommen sind, und auch in anderen verschiedenen Büchern das Rätsel zu lösen versucht. Man hat trotzdem heute noch darum viele unbeantwortete Fragen. Die einen sind daher zwar von dem Tod Hitlers überzeugt, aber die anderen (manchmal

mit einer bestimmten Absicht) behaupten, daß er überlebt hätte.

Im Grunde genommen ergibt sich dies daraus, daß sogar führende Biographen mit auseinandergehenden Ansichten beim Nachweis dieser historischen Tatsache unterschiedliche Argumentationen vorgebracht haben. Durch diese jeweils zuverlässig scheinenden verschwommenen Äußerungen sind ihre Leser im einzelnen anders informiert.

Das zeigt, wie schwer der Nachweis von den historischen Tatsachen ist, und auch wie unzuverlässig die Informationen allgemein sind. Man versucht aufgrund von zweifelhaftem Material die Naziliteratur und den Nationalsozialismus zu analysieren. Darüber hinaus versucht man damit, über Hitlers Persönlichkeit, Gedanken, Eroberungspolitik und auch das Juden-Massaker sprechen.

Die Erkenntnis dieser heutigen Untersuchungsverhältnisse um den Tod Adolf Hitlers führt einen dazu, noch einmal sorgfältig zu bedenken, wie man eigentlich die Naziliteraturforschung von neuem durchführen sollte, zumal man in Japan seit hundert Jahren aus Europa nicht nur Materialien, sondern auch Methoden der Wissenschaft eingeführt hat und Japans Wissenschaften sozusagen als "Einfuhrwissenschaft" lange Zeit eine eigene Grundlage entbehrt haben.

## 註

- (1) Vgl. 野田宣雄『教養市民層からナチズムへ』名古屋大学出版会 1988年 著者自身の「あとがき」
- (2) 野田宣雄『ヒトラーの時代』下巻 講談社 1976年 S. 181-S. 182.
- (3) ベジュメンスキ S. 135-S. 137.
- (4) Vgl. z. B. マーザー S. 432.
- (5) Vgl. Ebd. S. 479-S. 485.
- (6) Vgl. ベジュメンスキ S. 121-S. 122.
- (7) アービング 第3巻 S. 459.
- (8) ベジュメンスキ S. 135.
- (9) Ebd. S. 137.
- (10) Vgl. トーランド 下巻 S. 507.
- (11) Vgl. Ebd. S. 507.
- (12) ベジュメンスキ「ドイツ語版序文」 S. 203.
- (13) Vgl. トーランド 下巻 S. 507-S. 508およびベジュメンスキ S. 121-S. 122.
- (14) ベジュメンスキ S. 174.
- (15) Vgl. Ebd. S. 180.

- (16) Vgl. 本論IVの(8)  
 (17) Vgl. 本論IVの(9)

### 参考文献

- (1) H. R. Trevor-Roper : THE LAST DAYS OF HITLER, 1947.  
 (H・R・トレヴァー＝ローパー『ヒトラー最期の日』筑摩書房 1975)
- (2) Alan Bullock : HITLER. A STUDY IN TYRANNY, 1952.  
 (Alan Bullock : Hitler. Eine Studie über Tyrannei, Düsseldorf 1959)  
 (アラン・バロック『アドルフ・ヒトラー』みすず書房 現代史体系 第2巻 1960)
- (3) William L. Shirer : The Rise and Fall of the Third Reich, 1960.  
 (ウィリアム・L・シアイラー『第三帝国の興亡』全5巻 東京創元社 1961)
- (4) Werner Maser : Adolf Hitler. Legende, Mythos, Wirklichkeit, 1971.  
 (ヴェルナー・マザー『ヒトラー伝：1 人間としてのヒトラー』  
 『ヒトラー伝：2 政治家としてのヒトラー』サイマル出版会 1976)
- (5) Joachim C. Fest : Hitler, 1973.  
 (ヨアヒム C. フェスト『ヒトラー』上・下巻 河出書房新社 1975)
- (6) John Toland : ADOLF HITLER, 1976.  
 (ジョン・トーランド『アドルフ・ヒトラー』上・下巻 集英社 1979)
- (7) David Irving : HITLER'S WAR, 1977.  
 (ディヴィッド・アーヴィング『ヒトラーの戦争』全3巻 早川書房 1988)
- (8) Lew Besymenski : Der Tod des Adolf Hitler. Unbekannte Dokumente aus Moskauer Archiven. Eingelitet von Karl-Heinz Janben. Christian Wegner Verlag, Hamburg 1968.  
 (レフ・ベジューメンスキ『ヒトラーの死神 モスクワ公文書館の知られざる記録』国書刊行会 1984)
- (9) Roger Manvell and Heinrich Fraenkel : Doctor Goebbels, His Life and Death, London 1960.  
 (ロージャー・マンヴェル、ハインリッヒ・フレンケル『第三帝国と宣伝 ゲッベルスの生涯』東京創元社 初版 1962)
- (10) Nerin E. Gun : EVA BRAUN, Hitler's Mistress, 1968.  
 (ネリン・E・グーン『エヴァ・ブラウン ヒトラーの愛人』日本リーダーズダイジェスト社 1973)
- (11) 野田宣雄『教養市民層からナチズムへ』名古屋大学出版会 1988年
- (12) 野田宣雄『ヒトラーの時代』上・下巻 講談社 1976年  
 (※ 本論は、『ファシズム文化研究会 通信 No.3』(1990.9)掲載の「ヒトラーの最期」に加筆改訂を加え、ドイツ語のレジメをつけたものである。

(1991年4月19日受理)